様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　21 年　3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２００６～２００９
課題番号：１８５２０５７３
研究課題名（和文）「９・１０世紀の東フランク・〝ドイツ〟王国における政治構造とエトノス生成」
研究課題名（英文）　Eastern Frankish and „German“ Kingdoms in the 9th and 10th Century. Its Political Structure and Ethnogenesis.

研究代表者
三佐川 亮宏（MISAGAWA AKIHIRO）
東海大学・文学部・准教授
研究者番号：２０２３９２１３

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学、西洋史
キーワード：東フランク王国、ドイツ王国、エトノス生成、起源説話

１．研究計画の概要

本研究計画が対象とする時期は、９世紀～１０世紀、すなわち、フランク=カロリング帝国の動揺・崩壊期からポスト・カロリング期における東フランク・〝ドイツ〟王国の成立期にかけてである。帝国・皇帝権、王国・王権、分国という政治的空間・制度・理念の複合的・重層的構造の中で、各レヴェルにおけるエトノス生成は、いかに進行し、あるいは阻害されたのか。本研究計画を貫く問題意識は、今日統合へと向かいつつあるヨーロッパの多様性を、１９世紀的な国民国家のパラダイムとは異なる視座から理解する確かな手掛かりを与えてくれるはずである。

２．研究の進捗状況

４年間の研究期間においては、次の４点に重点を置いた。（１）関連史料箇所の調査・収集。（２）特に重要と目される史料箇所についての詳細な検討。（３）史料解釈上の方法論の確立。（４）１９世紀以降のドイツ中世史学史研究の整理。

（１）：平成１８～１９年度におこなった各種学術機関での文献。調査・収集を通じて、既におの大半の課題を達成している。ただし、課題に関連する研究文献の調査・収集は、今後も引き続き継続する必要がある。

（２）：１０世紀～１２世紀に至る期間の、東フランク=ドイツ王国におけるエトノス生成を、主要な論点、すなわち「ローマ帝国理念とその統合作用、「民族と部族」、「新部族大公領と王国の分国構造」、「起源説話」等に即して考察した。

（３）：中世の歴史叙述者が書き留めたのは、あくまでも、彼らの生きる〝現在〟の解釈範型から主観的に想起され、彼らの望む理想的歴史像へと再構築された過去の姿である。他方、その史料を解釈する研究者の側でも、問題意識、同時代の精神状況等の影響を強く受けており、その結果、「二重の理論形成」が生じる。この主題は、現在の歴史学界でも最も激しく議論されている課題であり、本研究でもまだ結論を得るには至っていない。個別研究を通じて、なんらかの総合を見出すというオーソドックスな方法に立ち戻ることになろう。

（４）：１９世紀以降のドイツ中世史学史研究については、特にナチズム期における研究

史を同時代の政治イデオロギーとの関連において整理する作業に取り組み、小論と学会発表を通じて、その成果の一端を発表した。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。
（１）（２）（４）については、上記の通り、研究開始当初の予定通り順調に進展しているといえる。（３）については、目下その出口を模索中であるが、研究終了時には一定の成果を挙げることが可能であると思われる。

４．今後の研究の推進方策
残された最後の１年間は、（３）と（４）の課題に重点が置かれる。目下、研究成果を博士論文として執筆する作業に従事している。『ドイツ史の始まり ── 中世ローマ帝国とドイツ人のエトノス生成』。全１５章、原稿用紙換算約１３００枚を予定しており、現時点ではおおよそ３分の２程度を書き終わったところである。平成２１年度の最後の研究期間内に完成させる予定である。将来は、著書として公刊することを予定している。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①三佐川 亮宏「書評：小倉欣一『ドイツ中世都市の自由と平和－フランクフルトの歴史から』」、（査読無）、『西洋史学』２３２、２００９年、６９－７１頁。

②三佐川 亮宏「歴史家たちのその後－ナチズム期の中世史研究」、（査読無）、『創文』５０６、２００８年、１９-２２頁。

〔学会発表〕（計１件）

①三佐川 亮宏「ナチズム期における中世史研究－「ドイツ史の始まり」をめぐる議論から」、近現代史研究会第 78 回研究会、2007 年 12 月 15 日、立正大学。